

町四一顯真学苑宛申込みれるのが便宜かと思
われる。(B6・一三三頁・一五〇円・一九
五二年三月二五日・顯真学園発行)

——門脇禎二——

仁井田陞編

近代中国の社会と経済

本書は文部省中国現代社会研究委員会所属
の十二氏による次の諸論文から成つている。

- ①新民主主義に於ける地方行政および司法
の變革——平野義太郎
 - ②中国に於ける地方自治
制度近代化の過程——松本善海
 - ③華北農村
の村費——中村治兵衛
 - ④保教と変法——市古宙
三
 - ⑤孫文主義土地革命理論の發展構造——山
本秀夫
 - ⑥中国近代工業の發展——遊部久藏
 - ⑦中国におけるギルド・マター・チャントの構造——
今堀誠二
 - ⑧幫・同郷會・同業公會とその転
化
 - ⑨中国農村社会と家父長權威——仁井田陞
 - ⑩祈雨習俗——直江広治
 - ⑪現代中国文化と旧
宗教——酒井忠夫
 - ⑫中国現代文化の民族的形
式——野原四郎
- 以上の諸テーマが示す様に、
夫々の論文が対象を異にし、甚しく不統一の
様に見える。にも拘らず本書が單なる論文集

でなく、「近代中国の社会と経済」と題して
刊行されたのは、「研究の分野を異にするもの
が、共通のねらいをもつて共力する」(仁井田
所)に基いている。従つて本書を読み解く第一
の鍵は、その共通の狙いが何であり、それが
全体としてどの様に具体化されているか、に
あるだろう。第二の問題は、個々の論文の
中、特に注目すべき点は何か、にあると思
う。以上の二点から本書に対する感想を述べ
たい。

モンテスキューやヘーゲル以来、欧米学者
達が東洋社会に發展を見ず、所謂停滞性理論
で東洋社会を律した事は、東洋をいつまでも
植民地の地位に置こうとした彼らの希望と一
致していたけれども、現実の東洋社会はその
観方を打ち破つてめざましい變革をとげた
し、又とげつがある。しかし、此の變革化は
一挙にして成しとげられたのではなく、古い
諸關係、古い伝統が長く變革の行く手をはば
みつけて来た。かくて中国社会の變革過程
はまことに複雑を極める。構造的に複雑な此
の中国近代社会の變革過程と諸前提とを夫々
線合的に研究する事——これが本書の狙いで

ある。(仁井田)では此の狙いは全体として如何
に具体化されているか。

古い社会的諸關係に論及された具体例を唯
一つだけ借りよう。家産法の上では家父長權
威を否定的にいう農民がその同じ口で逆に婚
姻の自由を否定したり、親が懲戒のために子
を殺しても違法ではないと言つたりすること
にうかがえる複雑な古い家族制度。そこで
亦、質妻が質の期間中に生んだ子は、たとえ
質にとる前既に懐胎していた場合でも質取主
の子となり、質入主の手に人妻を返した後に
生れた子に就いては、質入れ期間中に懐胎し
たものであつても、質入れ主の子となり、質取
主はこれを自分の子とすることはできない。
——つまり子は物であり、妻は入質・売買の
対象物である家族關係。(仁井田氏第⑨論文)
かかる現象は、所謂大家族制ではなく、四・
五人位の小家族が支配的であるからと云つ
て、決して古い家族的關係が近代的な分解を
示していないこと、かかる家父長權威が、小
家族をも貫ぬいて近代革命の前進を執拗には
ばんでいたこと等を明らかに示している。
かかる複雑な古い社会的諸關係と伝統につい

ては、対象こそ、地方行政・自治制度・村費・意識・産業・ギルド制度・習俗等の差はあれ、第②、③、④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩等の諸論文においても丹念に追究され、共通の狙いが本書全体の奥底に流れていることは否定出来ず、私達に大きい示唆を与えてくれる。

他方、変革過程についても、第①、⑤、⑧等の諸論文に於て正しく追究されている。たとえば、平野代の第①論文の如き、新民主主義社会における地方行政と司法制度の変革過程が、単に制度上の変化としては捉えられず、前者が二七年の湖南農民運動以来のほげしい反封建闘争の中から産み出され、且つその精神を押し進める方向に形成されて来たこと、後者も土地革命における人民法廷と本質的につながらるものとして把握されている。それ故にこそ、それが国民党政權下や旧ブルジョア民主主義社会の地方行政、司法制度と全く異り、変革的に、人民共和国政權の基礎をなすことの理解が与えられる。とりわけ山本氏の第⑥論文は、孫文思想の中核である土地革命理論の發展過程を廻り下げた好篇である。

即ち、土地所有関係には手をふれず、地価の値上り分を國有とする初期の「平均地権論」——それは農業革命や農民解放の目的も見透しもない、他方、絶対地代を破壊する可能性を含む事に於ては、資本主義的農業をめざすブルジョアの理論——が、一九二二年十一月の国民党政綱にあらわれた、変革的理論に發展、そこではじめて平均地権論が農業農民問題解決の爲の基本政策として新しく出發する。かくて「耕者有其田」というあの變革的理論に結実して行く過程が、孫文の全理論的体系の展開との関連に於て解き明かされている。これまで大切であつて而もネグレクトされていた分野が氏によつて開拓され始めたのは注目ししよう。

かくて、変革面の追究に於てもその狙いは全体としての本書に底流している。此の意味で本書は單なる論文集ではなく、共通の題目の下に一冊として刊行される可き意義を持つ。中国史の中にあつて、特に研究される可くして、最も立ちおくれていた近代史部門に多くの研究人が「共通の狙いと共力」に結集された事は、従来の個人々々による手工業的研究

形式を打ち破つて、今後の研究体制に大きい示唆を与えるに違ひなく、その点、本書は高く評價されねばならない。又、本書の姉妹篇「近代中国研究」以来のたゆまざる努力は尊いものと思う。

第二に、個々の論文中特筆すべき点については、酒井氏第⑩論文、野原氏第⑨論文は、大切な問題を中国近代史研究に投げかけている。即ち、百年に亘る並々ならぬ近代的變革運動の過程で、而も先に引いた如き複雑にして古い社会的諸關係——本書今堀氏の言葉を借りれば、「奴隸制の癒着した封建社会」のもつ諸關係と対決しながら、近代社会をえいえいと闘い取つて来た夫々の變革者乃至諸階級が、その様な伝統的諸關係を否定しつつ、却つて正しい民族の伝統を如何に變革的に生かして来たかと云う問題である。それは、百年の間、祖国と民族の危機に直面しつつけた中国國民が、夫々の歴史的段階に應じて、真に祖国を愛する者、近代史の領軍を前向きに押し進める者として真剣に取りくんだ問題であり、祖国と民族の危機に直面している私達日本國民にとつても切実な、従つて又多く

の歴史研究者が現に取りくくでいる問題でもある。変革的過程にある民族はその変革の課題がより幅広く深いものであればある程、民族の誇り可き遺産・伝統を正しく生かし、変革の糧として行く。困難な中国の近代的変革運動の中で民族の歴史的伝統と誇りとをいかに呼びさまし、そしてそれをどの様に変革の糧となして行つたか。それは、現在、日本民族の危機が深刻であればあるだけ、私運にそのまま通ずる実践の問題である。勿論、酒井氏や野原氏の論文が完全な形で此の問題を展開しているとは云へない。たとえ、酒井氏の論文のし方は、主として「旧文化に対する新中國の態度、政治的には政策を明らかにする」事に主眼がおかれており、帝国主義や国内反動勢力との闘いの中で正しい民族の伝統が、どの様に變革を支えて行つたか、いかなる伝統がその際よびさまされたか等の深い掘り下げが乏し、又重点を宗教に置かれた事等、どちらかと云えば形式的に偏つて

いる。しかし、昨年来歴研が「民族問題」や「民族の文化」を取り上げる以前に、かかる問題を取り上げられた事は、本書の価値を高め、姉妹篇「近代中に研究」からの学問的發展を示すバロメーターとなつてゐる。以上、二つの面から、本書の意義を略述して来た。ここで、今後も組織的な共力を続けられる執筆の方々に、一、二の点につき要望したい。

先に書いた様に、本書を高く評価しつつ、なお心残りなのは、本書を通読した際、何か生々とした心と迫つて来るものに乏しいという事であつた。それは大体次の様な所から来ていると思ふ。

中国の複雑な古い社会的諸關係を取り扱つた論稿は、その主な努力が古い諸關係の分析のみに注がれており、變革過程を追究した論稿は、逆に變革過程にのみ重点が注がれている。否定し變革する可き諸關係は主としてそののみ追究される時、その真実の姿が浮き彫りにされず、變革過程が主としてそののみ提出される時、生々しい變革の姿が印象づけられない。云い換れば、本書の二つの主題——變革の諸前提と變革過程——が夫々、孤立的に「解釈」され、「説明」されているという感が深いのである。變革と云い變革の諸前提

と云いひつきよう、両者が弁証法的に統一されてはじめて各々が占むる可き地位を正しく占める。

直江氏の第⑩論文は、これまで余り取り上げられなかつた中国の「祈雨習俗」を詳細に述べてゐる。しかし、それは、「説明」されているだけである。二十世紀の時代になお雨乞いが大きい部分を占める中国農民のおしひしがれた生活。ここでは、その様な原始的な習慣を押しつけて来る支配者の権力があり、その重圧の下で、古い信仰と原始的習俗にすがりつつも、重圧と闘いつづける農民の生々しい生活がある筈である。そして、その苦しい闘いと労働者の指導による農民の立ち上りこそ、中国近代社会の姿ではあるまいか。今堀氏の第⑨論文さえ、ギルド制の解説的傾向が強い。少くとも、ギルド制が打ち破られて行く近代化の方向は示していただけたらと思ふ。遊都氏の論文も、中国近代社会の研究には是非必要な近代工業史を対象としつつ、民族資本の官僚資本との闘争にさへふれられていず、純経済的統計学的な弱さにおち入つてゐる。他方、帮その他の變革過程を扱つた幼

方氏の労作も、労働者による古きものとの対決が十分に描かれず、たとえば労働者大会の決議でその対決過程が代置される様なし方が取られている為、真実の変革過程が生々と印象づけられないうらみがある。

一般に、日本の支配階級が中国の近代的変革を阻止し犠牲に供する事によつて、内在的矛盾を糊塗し自らの資本主義を高度化したという歴史的環境は、兩國の近代社会を密接不可分に關係づけて来た。云い換えると、中日兩國の国民は、日本の支配階級を共通の歴

史的対立者として持つてゐる。それ故に中國の近代的変革は私達の社会の真の變革的近代化―民主化、乃至私達日本国民の真の解放と無關係ではなく、むしろ実践的に相つながら親近性をもつてゐる。この事は、中國の近代的變革が決して、解説や説明であつてはならぬ事を私達に命ずるのである。もし此の観点を欠き、單なる解説に終るなら、まことの中國近代社会を描く事は出来ないであらう。今堀氏は「われわれの生活を規定しているアジアの社会の構造分析は実践的課題の重要さに比して実証的研究のたちおくれが目立つて

いる」と云われるが(本書七頁)私は逆説めいて恐縮だが、「実証的研究の多いのに比して、実践的課題追究の立ちおくれが目立つてい」と云いたい。

もとより、本書を世に問はれた先学とその協力的組織への期待が大きい故の妄言である事を諒解していただきたい。(昭和二十六年五月刀江書院發行A5三五〇頁四〇〇円)

——里井彦七郎

Raymond Bloch, *L'Ethnologic, problèmes, méthodes et perspectives* (Revue historique, Janvier Mars, 1952.)

エトルスキ人が初期イタリア特にローマの歴史的發展に対して演じたその歴史的重要性は西洋史の概説を学んだものの誰しも等しく認める処である。然るにこのエトルスキ人の起源の問題に関しては未だその決定的学説がなく又この言語は完全な解説の域には達してないものである。本論文はその意味において短い論文であるけれども、エトルスキ人の近

況を知る上に極めて有益なものと考えられる。この論文の執筆者たる Raymond Bloch なる人については詳細な事はわからないけれども、戦後筆者の知るところでは *Les origines de Rome* (Que sais-je? 1946) を書き、又イタリアのエトルスキ学者 Palliuno の *Ethnologia* (Milan 1942) を仏訳した人である。(La civilisation étrusque, P. yot, Paris, 1949. 尙この著書に關しては西洋史学十五輯に私の紹介が出る筈である)

凡そ先史時代或は原史時代の歴史研究は一般にそうである如くにエトルスキ学の發展も言語学と考古学の發展に存在しなければならぬ。特に例えエトルスキ文書が存在してその解説が未だ完全に行われざる現段階においては考古学の發掘の歴史が又エトルスキ学の發展の歴史であると言ふことも出来るであらう。その意味において著者は十八、十九及び二十世紀のエトルスキ学の歴史的發展を素描しているが、本論文は 1 エトルスキ人の起源 2 エトルスキ言語 3 エトルスキ文化の三つの部分にわけることが出来るであらう。エトルスキ人の起源については既に古典古